

世界をみつめて3

イスラーム社会と民主主義

堀川 徹

9月11日、東日本大震災から半年のこの日は、2001年に起きた9.11同時多発テロから10年の日でもあった。多くのメディアが特集を組むなか、NHKも「クローズアップ現代」で9.11特集番組を放送した。この10年間に世界各地で起こった出来事を取り上げ、最近中東各地で起きている民主化運動を踏まえて、中東担当の記者は、「この10年がもたらしたのはテロリストとアメリカの敗北」とであると総括した。前号でも述べたように、中東の民主化運動によってテロが無くなるといった楽観論には同調できないが、この地域に民主主義政治が本当に根付くかどうかは大いに注目される場所である。なぜならそれは、欧米主導の国際社会とイスラーム世界とが、今後どのように折り合っていくかを見る際のヒントになると思われるからである。

現在、故郷を離れたイスラーム教徒と、欧米各地のホスト社会との間で様々な摩擦が生じている。フランスで、宗教の顕示を禁じたライシテの原則に反するとして、スカーフをかぶって登校したイスラーム教徒の女子生徒が退学処分を受けたのは、その例としてよく引き合いに出される。こうした事態は種々の理由によって生じると思われるが、キリスト教とイスラームとは、同じ一神教とはいえその成立過程に大きな違いがあることが最も大きな原因ではないかと考えている。

イエスが教えを説いた時、そこにはローマ帝国という盤石の国家があり、人々は安定した日常生活を営んでいた。敵から攻撃を受ける心配も、日々の生活に対する不安もない中で、イエスは人の心に目を向け、真の信仰である“愛”を説くことに専念できた。しかしムハンマドは、神の啓示に従ってイスラームを説いた時、故郷のメッカを追われ、戦いの中で自分に従った信徒集団を守りつつ新たな体制作りをしなければならなかった。つまり彼は、宗教指導者であると同時に、政治、軍事、司法の長として、信徒たちの日々の生活が成り立つようあらゆる側面でリーダーとしての

役割を果たさねばならなかった。それがイスラームの性格を決定づけたのである。

ヨーロッパのキリスト教社会では、フランス革命に代表される市民革命によって政教分離を達成して近代社会の形成へと向かった。ただしそこで行われたことといえば、中世に権力をもった教会の桎梏を断ち切り、イエスの説いた信仰の原点、すなわち、キリスト教本来の姿に立ち戻っただけのことである。それと比較してイスラームは、神の言葉『コーラン』に、信仰や教義に関することから社会生活や国家に関わる事柄まで記されているように、単なる宗教にとどまらず、信徒にとっては社会生活そのものなのである。政教分離には困難が伴うと言えよう。

政教分離ができないイスラーム社会では、民主主義など不可能だとの議論がある。構成員の存在や意見に同一の価値を認めることが、民主主義成立の前提であるにもかかわらず、神に関するものは絶対的として最初から議論の対象とならないからだという。しかしヨーロッパでも、神を冒瀆するような意見はもとより選択肢とならないように、民主主義とは、その社会の構成員の良識によって成り立つものである。イスラーム社会においても、イスラーム型の民主主義が根付いていく可能性は高いのではないだろうか。

ここで注目されるのがトルコ共和国である。トルコは住民のほとんどがイスラーム教徒でありながら、1923年の建国時から現在に至るまで西欧的近代主義の原則に則り政教分離を貫いている。しかしながら一方で、最近政権を担っている公正発展党は、そうした原則を踏まえながらも、イスラーム色を鮮明にした政策を打ち出して人々の支持を集めている。トルコの政治は今後どの様な道を歩むのか。中東諸国の民主化や、国際社会とイスラーム世界との調和を占う上でも目が離せない存在である。

ほりかわ とおる（教授・西南アジア史）